

学生の街・神田を歩く —大学における野外実習の記録—

牛垣 雄矢*

キーワード：野外実習，巡検，地理，学生街，神田

I はじめに

東京学芸大学における春学期開設科目「地域調査法」は、社会科地理学教室に配属されている椿，中村，青木，牛垣の4名の教員で担当し，それぞれが1か所を指定して日帰りの野外実習，いわゆる巡検を実施する科目である。報告者は，東京学芸大学へ赴任した2013年から2015年にかけての3年間，東京都千代田区の神田一帯をフィールドとして野外実習を実施してきた。本報告では，この野外実習のルートや学習内容について整理したい。

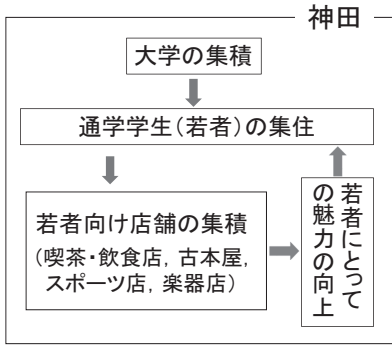
都市地理学を専門とする報告者が，地理学における野外実習のフィールドとして神田を設定した理由は，以下のとおりである。一点目は，大都市の都心部に位置しながら，特徴的な景観・機能を有することである。都市空間における主要な構成要素としては，オフィスビル，店舗，公共施設，マンションなどがあげられるが，これらは外観の観察からは地域ごとの差異が把握しづらい。商業の面では，大手チェーン店が国内外に進出して商業地の均質化が進んでおり（牛垣，2015），都市空間において地域的差異をとらえるのは難しくなりつつある。しかしながら，神田には大学や専門学校などの各種学校が多く，その関係で神保町には古本，スポー

ツ用品，楽器の専門店街などが形成され，機能的にも景観的にも特徴のある空間がみられる。

また住居表示上では外神田と表示される秋葉原には，アニメ・パソコン・家電製品の専門店やメイド喫茶，アイドルグループの劇場などが集積して個性的な機能・景観を形成しており（牛垣ほか，2016），いわゆるオタクと呼ばれる人々の聖地として国内外から注目されている。これらの要素が狭いエリアに集積しており，一日数時間程度の野外実習を統一的なテーマで実施することができる点も利点である。

二点目は，神田という地域は，「動態地誌」¹⁾や「地域構造」²⁾といった，地理学的な概念を適用することにより，その特徴がとらえやすくなる点である。前掲の大学や専門学校，古本屋，スポーツ用品店，楽器店などは神田の地域構成要素であるが，そもそも大学が集積して多くの若者が集まることで，これらの大学生向けの店舗が集積している。動態地誌や地域構造の観点で表現すれば，大学やここに通う若者が中核となって他の地域構成要素と関わりをもち，これによって神田という一つのまとまりある地域を形成している（第1図）。今日の学習指導要領では，特に中学校の地理教育において動態地誌の観点が重視されている。中学校の日本の地誌学習における空間スケールは，「関東

* 東京学芸大学・地理学分野



第1図 動態地誌的にとらえた神田の地域構造の模式図

地方」や「九州地方」といった地方スケールであるが、本稿ではミクロナスケールで地域を見る際にも動態地誌的の観点が有効であることを示したい。

三点目は、上記の一点目で触れた神田の景観的・機能的な特徴は、歴史的な背景で形成されたという点である。近年の中学校や高等学校での地理教育では、地理的事象の理解に対しても歴史的観点を取り入れることが求められている

ため(文部科学省,2008;2009),この点においても適当な対象地域と考える。

以下の章では、神田をフィールドとした地理学における野外実習の事例として、Ⅱでは野外実習のルートと配布資料を示し、Ⅲではチェックポイントごとの学習内容を整理する。Ⅳではこの野外実習の要点を図示し本稿のまとめとする。

Ⅱ 神田における野外実習のルートと配布資料

神田における野外実習のルートを第2図に示す。集合は、最初のチェックポイント①に近い皇居(旧江戸城)の田安門に集合することとする。田安門から、①蕃書調所跡、②専修大学発祥の碑、③東京外語大学発祥の碑・如水会館、④東京大学発祥の碑、学生会館、野球発祥の碑、⑤神保町古本屋街、⑥神保町スポーツ店街、⑦御茶ノ水楽器店街、⑧昌平坂学問所跡(現・東京医科歯科大学)、⑨秋葉原、⑩千葉周作道場跡、という順序で回ると効率的に歩くこ



第2図 神田における野外実習のルートとチェックポイント

資料：『東京都区分地図 千代田区』(昭文社,2014年発行,原寸から43%縮小)

注：①～⑩は考えられるルート、a～jはその他のチェックポイント。

とができる。

仮に集合時間を10時とすると、⑤神保町古本屋街の辺りで正午前の時間になり、ここで昼休みとするのがよい。神保町やJR御茶ノ水駅、JR水道橋駅周辺には、かつては学生を対象に、今日ではビジネスマンなども対象としたコストパフォーマンスに優れた飲食店が多く立地するため、飲食店の集積地としての特徴を把握する意味でもよい。1時間強の休憩時間をとって再開すると、最後の地点である⑩千葉周作道場跡にはおよそ16時前後に到着することができる。次に、野外実習参加者へ配布していた地図を第1表に示す。まず野外実習のベースマップに使用する地図は、昭文社が販売している7千分の1スケールの『東京都区分地図 千代田区』（2014年）とした。地図の見やすさという点では国土地理院発行の1万分の1地形図「日本橋」図幅を使用したいが、同地区の最新版が1999年のものであり時間が経過しているため、これは補足的に使用する。明治初期における官立大学

の集積状況が把握できる地図として、古地図史料出版から販売されている陸地測量部の二万分の一東京近傍図中部（1886年製版）を使用する。第二次世界大戦後の間もない時期の大縮尺地図として、都市整図社が作製・保管している「火災保険特殊地図」があるが³⁾、神田地区の部分を張り合わせ着色した地図が『あの日の神田・神保町』（武揚堂）に所収されているため、これを使用する。江戸末期の地図としては、蕃書調所が確認できる「尾張屋版江戸切絵図 飯田橋・駿河台・小川町絵図」（1863年）と、江戸の3大道場の一つである千葉道場の千葉周作宅が確認できる「尾張屋版江戸切絵図 日本橋北・内神田・両国浜町明細絵図」（1859年）を使用する。最後に、大縮尺地図ではないが、正井泰夫の「大江戸地理空間図」は、江戸末期の江戸の土地利用を1枚の地図にまとめて表してあり、大江戸の全体像をとらえるのに便利である。また20メートルの等高線が描かれているため、江戸の下町と山の手、すなわち沖積

第1表 神田における野外実習で配布する地図

	地図名	特徴
1	『東京都区分地図 千代田区』 1/7,000 (昭文社), 2014年	現在の状況を把握できる。野外実習のベースマップとして便利である。
2	1万分の1地形図「日本橋」平成11年修正	1998年以降更新されないが、建物や店舗の分布や形状が把握できる。
3	参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図 測量原図「東京府武蔵国麹町区大手町及 神田区錦町近傍」	明治10年代の東京中心部を詳細に描いた五千分の一スケールの地図である。一ツ橋付近には、東京大学、学習院、東京外国語学校、文部省が見られる。
4	陸地測量部二万分の一東京近傍図中部、 明治19年製版、古地図史料出版	神田一ツ橋付近には大学予備門、商業学校、学習院、文部省などがみられる。
5	『あの日の神田・神保町』（武揚堂）所収地 図（1950年頃）。原図は火災保険特殊地図 （都市整図社）。	戦後間もない時期の大縮尺地図で、建物の形状、店舗名や業種等が把握できる。神保町の古本屋街や神田日活、東洋キネマ、銀映座などが確認できる。
6	尾張屋版江戸切絵図 飯田橋・駿河台・ 小川町絵図、文久3（1863）年。	神田一ツ橋の御門外に九段下から移転した蕃書調所が見られる。
7	尾張屋版江戸切絵図 日本橋北・内神 田・両国浜町明細絵図、安政6（1859）年。	神田の「お玉が池」跡や、千葉道場の千葉周作宅なども見られる。
8	正井泰夫『江戸・東京の地図と景観』（古 今書院）所収の「大江戸地理空間図」 （1850-1868）。	明治期の実測図（迅速測図）をベースマップとして大江戸の地理空間を1枚の地図に復元した地図。沖積低地と洪積台地の境目に当たる20mの等高線も描かれている。

低地と洪積台地の境界線が読み取れるため、地形と土地利用の関係を読み取ることもできる。このほか、大学での野外実習の際には、神田に関する図表資料を数枚配布している。

Ⅲ 野外実習の学習内容

1. 蕃書調所跡 (地図番号①)

江戸末期の開国以降、洋学を取り入れる必要性を痛感した幕府は、天文方に設けていた蛮書和解御用を拡充し、1856(安政3)年に現在の九段下の昭和館の場所に蕃書調所を設けた(第3図)。この碑に並ぶ説明看板には、「蕃書調所跡 安政三年幕府はここに蕃書調所を設け、専ら海外の事情を調査すると共にその教育にあたらせた。この調所はのち神田一ツ橋通りに移って洋書調所に、更に開成所と改め、明治二年大学南校と改称して東京大学の前身となった。千代田区」とある。この説明にあるとおり、蕃書調所は一ツ橋へ移った後に今日の東京大学となるが、官立大学である東京大学がこの地に設立したことが、その後、神田に多くの大学が集積する大きな契機となる。

2. 東京大学発祥の地 (地図番号④)

神田一ツ橋へ移った蕃書調所は、江戸の切絵

図でも見ることができる(第4図)。これが後に東京大学になったことで、この地が東京大学発祥の地であり、日本における大学発祥の地とされている(第5図)。その地には、いわゆる旧七帝大と京城帝国大学・台北帝国大学の卒業生等で組織された学士会によって建設された学士会館が建っており、その前に「東京大学発祥の地」の碑が立っている。この説明看板には、「我が国の大学発祥地…明治十年(一八七七年)…東京開成学校と東京医学校が合併し、東京大学が創立された。…徐々に充実され明治十八年



第4図 江戸切絵図にみる江戸末期の一ツ橋の蕃書調所(1863年)

資料：尾張屋版江戸切絵図 飯田橋・駿河台・小川町絵図(原寸から55%縮小)。



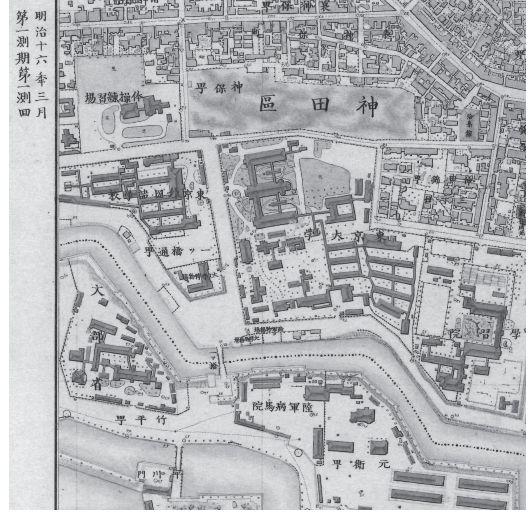
第3図 蕃書調所跡



第5図 東京大学発祥の地

までに本郷への移転を完了した。」とある。なお、この学士会館には「日本野球発祥の地」の碑も立っている(第6図)。野球は、開成学校のアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンによって伝えられた。ここに通った作家の正岡子規が野球好きであったことは有名だが、「野球」という名称は同窓の中馬 庚(ちゅうま・かのえ)がつけたという。

1883(明治16)年当時の五千分一東京図測量原図をみると(第7図)、江戸末期に蕃書調所があった場所には東京大学のみならず、現在の東京外国語大学の前身である「東京外国語学校」や、学習院大学の前身で当時は官立学校であった「学習院」がみられる。今では、「東京外国語学校発祥の地」の碑が、「東京大学発祥の地」の碑の向かいに設置されている。東京外国語学校は、1885(明治18)年にこの地で現在の一橋大学の前身である「東京商業学校」と合併しており、一橋大学もこの地に立地していたことになる。1886(明治19)年の陸地測量部作



第7図 明治期の神田一ツ橋一帯の様子(1883年)

資料：参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図
「東京府武蔵国麹町区大手町及神田区錦町近傍」
(原寸から49%縮小)

成の二万分の一東京近傍図中部には、この地は「商業学校」と記されている。一橋大学は、昭和期に入り徐々にキャンパスを現在の国立市へ移していくが、神田一ツ橋に立地していたことから、新しい校名を一橋大学としている。今も一ツ橋の地には、一橋大学の後援施設としてつくられ、宴会や結婚式場などとして使用されている如水会館が立っている。

3. 私立専修学校の黒門跡(地図番号②)

現在の私立大学の一つである専修大学の前身として、おもにアメリカ等の法律を学ぶ専修学校が1880年に設立された。現在の神田キャンパスの一角には、黒漆で塗られた冠木門の「黒門」が復元され(第8図)、同大学の発祥に関する説明看板が立っている。

この専修学校のほか、現在の法政大学の前身である東京法学校(1881年に神田駿河台にて設立)と、現在の明治大学の前身である明治法律学校(1881年設立、1886年から神田駿河台に立地)はおもにフランスの法律を、現在の早稲田



第6図 日本における野球発祥の地



第8図 復元された専修学校の黒門

大学の前身である東京専門学校（1882年に早稲田にて設立）と現在の中央大学の前身である英吉利法律学校（1885年設立、1926年に神田錦町から神田駿河台へ移転）はおもにイギリスの法律を学ぶ学校として発祥し、専修学校と合わせて五大法律学校などと呼ばれた。このほかにも、おもに日本の法律を中心に研究するための学校として、現在の日本大学の前身である日本法律学校（1889年設立、1895年に飯田橋3丁目から三崎町へ移転）も設立されている。

このように、1880年代に数多くの法律学校が設立したのは、当時の法曹界の事情がある。日本では大日本帝国憲法が、1889（明治22）年に公布、1890（明治23）年に施行され、これにより日本は法律に基づいて国を統治する法治国家としての体制を、とりあえずは整えたことになるが、これに向けて、法律を司る専門家としての弁護士（当時は「代言人」などと呼ばれた）の育成が急務となり、その中で多くの法律専門学校が誕生した（東京都千代田区、1998）。当時は法律的な知識を教授できる教員が不足していたために、教員は複数の官立大学と私立大学を掛け持ちしていたともいわれている。加えて、これらの大学の設立当時は路面電車である市電が敷設される以前でもあった。官立・私立の学校を掛け持ちする教師が徒歩で移動できる距離

に立地する必要があったことも、神田一带に大学が集積した原因の一つと考えられる。

4. 昌平坂学問所（昌平黌）跡（地図番号⑧）

現在、東京医科歯科大学のある一帯は（第9図）、かつては江戸幕府にとっての学問の府であり、儒学振興の中心的役割を果たした昌平坂学問所（1797年より官立）があった。この学問所は明治期に入ると新政府に引き継がれ、1868（明治元）年に昌平学校、翌年6月に大学校、同12月に大学と名称を変えるが、1870（明治3）年7月に閉鎖、翌年7月に廃止される。東京医科歯科大学キャンパスの東、都道403号大手町湯島線の道路沿いには「近代教育発祥の地」という説明看板があり、ここには「明治4年（1871）に文部省が設置され、我が国の近代教育の原点となる施策が展開されることになった。当地には明治5年師範学校（翌年、東京師範学校と改称）が開校し、その後、隣接地に東京女子師範学校が置かれた。」と記されている。ここに記された2つの学校は、ともに後に大塚へ移転し、東京教育大学（現筑波大学）とお茶の水女子大学となっている。

Ⅲの1や2で述べたとおり、神田に大学が集積した最初のきっかけは、神田一ツ橋の蕃書調所の存在によると考えられるが、江戸期から学



第9図 東京医科歯科大学（昌平坂学問所跡）

問の府が湯島にあったことが、そこから比較的近い一ツ橋に蕃書調所を移転させ、その地に文部省を設置させたことに影響したとも考えられる。もしそうであれば、この地に昌平坂学問所があったことも、神田に大学が集まった要因の一つであるだけでなく、最初のきっかけということにもなる。

5. 千葉周作の玄武館と東條一堂の瑤池塾の跡 (地図番号⑩)

神田一带は江戸期には旗本屋敷が多く、そのために江戸末期には寺子屋や私塾、剣術道場などが多く立地していたといわれる。当時は文武両道の考え方が浸透しており、私塾と剣術道場が近接する場合も多かった。江戸の三大道場の一つとされる北辰一刀流宗家の千葉周作の玄武館と、千葉と親交のあった東條一堂の瑤池塾(ようちじゅく)も近接しており、千代田区神田東松下町24の旧千桜小学校の一角に両者の顕彰碑が立っている(第10図)。尾張屋版江戸切絵図にも「千葉周作」と「東條平左衛門」の名前がみられる(第11図)。現在の千代田区岩本町2-5-13には佐久間象山の象山書院があり、その付近には江戸詩壇の第一人者とされた梁川星巖(やながわせいがん)の玉池吟社(ぎょくちぎんしゃ)も設立された。



第10図 千葉周作の玄武館と東條一堂の瑤池塾の顕彰碑



第11図 江戸切絵図にみる江戸末期の千葉周作宅と東條一堂宅(1859年)

資料：尾張屋版江戸切絵図 日本橋北・内神田・両国浜町明細絵図(原寸から84%縮小)。

司馬遼太郎は『世に棲む日日(一)』(1975年、文春文庫発行)の中で、江戸末期に神田一带で多くの私塾ができたことにより、明治期以降に多くの法律学校ができ、大学が集まることにつながったと説明している。江戸末期の私塾と明治期以降の法律学校とのつながりについては具体的に示されていないが、明治期以降に神田一带に各種学校が集まったのは、江戸期以来、この地が学問の地としての性格を有し、当時から若者が集まっていたことが影響していた可能性もある。

6. 神保町・御茶ノ水の専門店街 (地図番号⑤⑥⑦)

神田の神保町やJR御茶ノ水駅周辺には、古本屋・スポーツ用品店・楽器店の集積地がそれぞれ存在する。まず、神田神保町の古本屋街(地図番号⑤)は、世界一の古本屋街ともいわれており、明治期にはすでに形成されていたと

いう。当時の大学で使用する教科書は洋書が中心であったが、洋書は高価なため、学生は授業後に教科書として使用した本を古本屋へ高値で売り、次に受講する学生が古本屋で教科書を調達するというシステムができていたという（佐藤・ぶよう堂編集部，2008）。

また、地理学においては有名な話ではあるが、靖国通り沿いに立地する神保町の古本屋は、日差しから本の色あせを防ぐために、ほとんどの店舗が北向きに立地している（第12図）。なお、この古本屋街一帯は第二次世界大戦下の東京大空襲の際に焼け残っているが、その要因は、一説によれば当地が世界一の古本屋街で学術的資料の宝庫であったために、B-29のパイロットが爆弾を投下しなかったという。あくまで報告者の感覚ではあるが、他の文化財のみならず一般市民の命をも容赦なく奪った戦争中に、学術資料をそれほど重視したという考え方には違和感をもっている。

次に、神保町の古本屋街から靖国通りを東へ進むと、スポーツ用品店が集積する専門店街があらわれる（第13図，地図番号⑥）。元々は道具屋や靴屋だった店舗が、第二次世界大戦以前に学生たちの間で登山ブームが起こり、登山用品の専門店へと変わったことが、専門店街形成のきっかけという。例えばミナミスポーツは洋



第13図 神保町のスポーツ用品専門店街

靴屋から始まったという。これが昭和30年代にはアイススケートブーム、昭和50年代にはスキーブームが起こり、その影響で専門店もこれらのスポーツを中心とした品揃えへと変わったという（佐藤・ぶよう堂編集部，2008）。いつの時代でも、若者は流行に敏感であり、その若者をターゲットとした専門店街では、常に流行の変化に対応した取扱商品の変化がみられる。

JR御茶ノ水駅からお茶の水橋を南下して靖国通りへ向かう沿道には、楽器店が集積している（第14図，地図番号⑦）。これは高度経済成長期頃に集積したといわれているが、日本において1960年代以降にフォークソングブームやロックブームが起きた時期に対応している。



第12図 北向きに店舗を構える神保町の古本屋街



第14図 御茶ノ水の楽器専門店街

7. 秋葉原の専門店街 (地図番号⑨)

秋葉原は、今日ではアニメやゲーム関係商品の専門店やメイド喫茶、アイドルグループの劇場などがあり、日本のサブカルチャーの聖地として、国内外の若者を中心に人気となっている。本稿のフィールドである神田(神田川以南のいわゆる内神田)は、これまで見てきたように学生街という意味での若者の街としての性格を有している。秋葉原に見られる「若者の街」は異質なもののようにも見えるが、実は秋葉原における若者の街の要素も、神田の学生街と深い関係がある。

秋葉原の専門店街は、第二次世界大戦後にラジオ関係の専門店が集積したことに端を発するが、その要因の1つとして、神田神保町に集積していたラジオ部品関連の露店が、GHQによる露店撤去命令の際に秋葉原へ移転してきたことがあげられる。これにより秋葉原にラジオ会館、ラジオガーデン、ラジオストア、ラジオデパートができる。当時の露店は、食料品や衣料品など、まさに生活の必需品がかなりの割合を占めていた中で、神田神保町ではラジオ部品関連の露店が増え、これが秋葉原へ移転したことが、同地区における専門店街の形成に大きく影響している。今日までに、秋葉原地区は家電、パソコン、アニメ関係商品へと主たる業種を変化させてきたが、電気部品関連の店舗は現在も一定の集積を保っている(第15図)。神田と秋葉原の関係の二点目として、秋葉原は東京におけるゲーム制作会社の集積地の一つといわれるが、その集積の背景には神田・御茶ノ水地区に多くのゲーム制作関係の専門学校が存在するためという報告がある(馬場・渋谷, 2000)。このように神田と秋葉原とでは、若者の街として質的に異なり、関わりが薄いように思えるが、秋葉原の地域的特徴の形成に神田も影響していることがわかる。なお秋葉原における店舗の集積お



第15図 秋葉原の電気部品関連店舗

よび業種の推移のプロセスや背景、近年における質的な変化等については、拙著(牛垣, 2012; 2013; 2014; 牛垣ほか, 2016)を参照されたい。

8. その他

本稿は、神田をフィールドとして学生街というテーマで野外実習を行うことを念頭に置いているが、この地域には、学生街というテーマとは関係が薄いものの地理学的には関心の対象になるようなポイントがある。本稿の最後に、これらについても簡単に紹介する。

JR飯田橋駅の東、現在は大和ハウスビルやホテルメトロポリタンエンドモントがある一帯は、かつて貨物駅の飯田町駅があった(地図番号a)。この駅は1895(明治28)年に甲武鉄道(現中央線)のターミナル駅として開設され、1912(明治45)年に万世橋駅が開設されるまで、その役割を担った。

江戸城内堀の北門にあたる田安門(地図番号b)には、現在も枅形門が残されている。枅形とは、城郭の防衛力を高めるための施設で、四方形の空間に、一ノ門と二ノ門を設けて敵の直進を阻むもので、一ノ門が突破されても二ノ門で阻むとともに守備側が全面攻撃を与えるものである。江戸三十六見附と言われるように、江

戸城の内堀・外堀には多くの城門がおかれ、そこには見張り番としての見附と防衛施設としての枡形が設けられた。しかし基本的には防衛的観点から城下町がつくられた封建社会としての江戸期から、近代社会としての明治期へと移る中で、近代都市計画の一環として道路を拡幅・直線化し、そこへ路面電車を敷設して交通利便性を高めるためには、これらの枡形門は障害であったため、多くは撤去させられた。現在、封建時代の産物ともいえる防衛施設としての枡形は僅かに残されるのみとなり、「赤坂見附」など地名にのみ残されている場所もある。

靖国通りの地下鉄神保町駅からやや南西に、地理の教科書や地図帳として馴染み深い帝国書院がある（地図番号c）。そのほかにも、小学館・集英社・岩波書店（地図番号d）、古今書院（地図番号f）など、この一帯には数多くの出版社がある。出版社が集積した背景として、かつてはこの一帯に印刷会社が集積していたことが関係していたと考えられている。その印刷会社が集積した背景としては、上記の貨物の飯田町駅（地図番号a）において紙が出入荷されていたためともいわれている。

JR御茶ノ水駅の御茶の水橋から南へ向かうと、杏雲堂病院の敷地に「大久保彦左衛門屋敷跡」の碑がある（地図番号e）。大久保彦左衛門は、三河時代からの徳川家康の家臣で、江戸開幕後は江戸の旗本となり、晩年には『三河物語』を執筆する。駿河台という地名は、江戸の初期に駿河から呼び寄せた徳川家の家臣たちが住んだことが地名に残されたもので、大久保彦左衛門屋敷跡の碑は、地名の所縁に関わるものである。ちなみにこの大久保彦左衛門屋敷跡の碑の前には「法政大学発祥の地」の碑も立っている。

神田川は、かつては現在の日本橋川を流れていたが、江戸城の近くを流れてたびたび氾濫し

たために、二代将軍秀忠の時代に、神田山を切り崩して東側へ通し隅田川へと至る現在の流路へと変えられている。この人工河川（この部分の神田川の雅称を茗溪という）により、神田山は北の湯島台と南の駿河台に分けられた。この際の神田山の土は日比谷入江の埋め立てに使われたことは、江戸初期のまちづくりとして有名である。なおJR御茶ノ水駅前の御茶ノ水橋の南のたもとには、地名ともなった「お茶の水」の由来の碑も立っている（地図番号g）。

JR秋葉原駅の北西、現在は住友不動産のマンションギャラリーがたつ場所は、大手百貨店の一つである伊勢丹百貨店の誕生の地であり、数年前までは「伊勢丹発祥の地」の碑が立っていたが（地図番号h）、現在はなくなっている。伊勢丹は、1886（明治19）年に伊勢屋丹治呉服店としてこの地で開業し、1930（昭和5）年に株式会社伊勢丹の設立に合わせて現在の新宿三丁目へと移転している。伊勢丹は「帯の伊勢丹」として知られているが、これは発祥の地がかつては花街であり、その芸妓向けの商売をしていたことによるという（牛垣、2010）。

同じくJR秋葉原駅の北、現在はUDXビルやダイビルがある一帯には、1928（昭和3）年から1990（平成2）年にかけて、神田青果市場があった（地図番号i）。昭和初期、秋葉原には貨物駅があったことから、神田多町から移されてきた。現在、この地には再開発ビルが作られ、国内におけるIT企業が集積地の一つとなっている。これに伴い神田青果市場は大田区東海3丁目に移されている。

現在の須田町交差点の西側に位置する神田多町には江戸幕府の御用市場があり、その跡地には「神田青果市場発祥之地」の碑が立っている（地図番号j）。江戸期には、神田川や日本橋川の沿岸には河岸があり、そこから荷揚げされた青果物がここに集められたため、江戸の市場の

中でも最大規模を誇ったといわれている。

IV おわりに

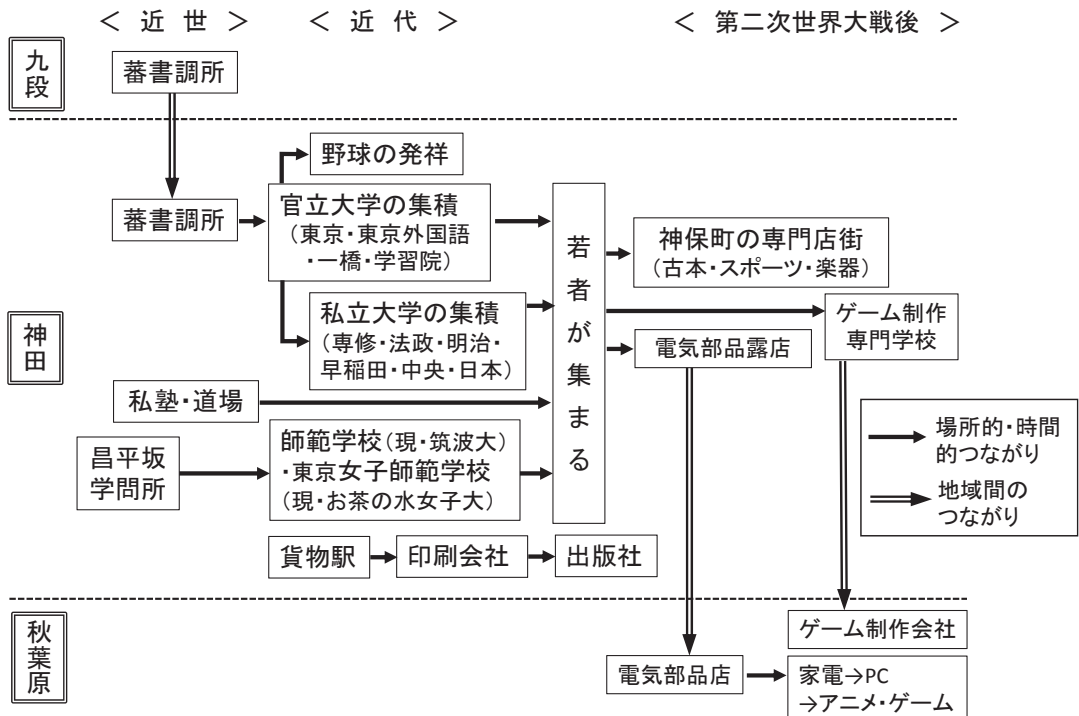
本稿では、東京学芸大学における「地域調査法」の授業において、報告者が実施してきた野外実習（巡検）の内容を紹介してきた。そのおもな点をまとめたのが第16図である。神田は、かつてほどではないものの、現在でも多くの大学が立地することで、古本屋・スポーツ用品店・楽器店など、若者向けの店舗が集積している。このような、大都市東京の都心において特徴的な機能や景観を有することには、歴史的な背景が強く影響していた。江戸末期に洋学の取り入れや海外事情の把握のために蕃書調所が設立され、これが九段から神田一ツ橋に移された後に東京大学へと変わり、その付近には多くの官立大学や私立大学が集積し、今日に至る神田

の地域の素地をつくった。

また、神田に隣接するオタクの街・秋葉原は、学生街・神田とは性格を異にして一見無関係のようにも思える。しかし秋葉原の電気部品店の中には神田神保町から移転したのも多いことや、秋葉原にゲーム制作会社が集積するのは、神田にゲーム専門学校が立地することが影響する。秋葉原の地域の特徴の形成にも学生街としての神田が関係しているのである。

第16図は、横軸には場所的・時間的な事象のつながりを、縦軸には地域間の事象のつながりを表している。今日に残る神田の地理的特徴は、おもにこの二つのつながりから形成されていることが分かる。

報告者は、これまではおもに商業地を対象として、その地域的個性がいかんかに形成・残存されてきたかに関心をもって研究してきた。地域において個性的な性格が形成された背景を探るに



第16図 神田における学生街の形成過程

は、地域の歴史を調べるのが近道と感じている。そのため、古地図と現代の地図を眺めて比較考察したり、それらをもって現地を歩き観察することは、報告者にとっては研究を進めるうえで必要不可欠な作業であるが、こういった行為が単純に楽しく、好きでもある。これは報告者の個人的な好み、ということに留まらず、自身にとって馴染みのある地域について新旧の地図をみるのは、多くの人が楽しいと感じるであろう、という思いもある（本学において、社会科学以外の学生の反応を見ると、そうとも言えないと感じる場合もあるが）。現在の地域の特徴を理解するため、また地理好きを増やしていくためにも、地理学や地理教育で重視されている地域構造や動態地誌的視点に加えて、歴史的観点を取り入れた地理学の野外実習を今後も実施していきたい。

注

- 1) 「動態地誌」とは、以前の地誌学習のように地域の事象を網羅的に把握するのではなく、その地域において中核となる事象を核として他の事象を関連づけて地域を理解する方法である。なお、報告者は動態地誌的観点から川崎の地域の特徴と地域構造について考察している（牛垣, 2016）。
- 2) 地域構造の定義として、木内（1968）では「一地域を構成している諸要素と諸因子の関係」としており、本稿でもこの考えを用いる。
- 3) 都市整図社の「火災保険特殊地図」についての詳細は牛垣（2005）を参照いただきたい。

文献

牛垣雄矢（2005）：昭和期における大縮尺地図としての火災保険特殊地図の特色とその利

用。歴史地理学, 47（5）, pp.1-16.

牛垣雄矢（2010）：地理学における大縮尺地図の利用とその意義—近代期における東京の都市地域を事例に—。研究紀要（日本大学文理学部自然科学研究所）, 45, pp.69-81.

牛垣雄矢（2012）：東京都千代田区秋葉原地区における商業集積地の形成と変容。地理学評論, 85, pp.383-396.

牛垣雄矢（2013）：東京都千代田区秋葉原地区における商業集積の実態と背景に関する一考察。研究紀要（日本大学文理学部自然科学研究所）, 48, pp.1-9.

牛垣雄矢（2014）：商業地における地域的個性の形成に関する一考察—東京の都心周辺地域を事例として—。学芸地理, 69, pp.30-45.

牛垣雄矢（2015）：日本における商業空間の性格とその変化に関する一考察—盛り場からショッピングセンターにいたる空間的性格の変遷より—。東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ, 66, pp.49-64.

牛垣雄矢（2016）：動態地誌的観点と歴史的観点を取り入れた地域構造図の作成—神奈川県川崎市を事例に—。東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ, 67, pp.61-68.

牛垣雄矢・木谷隆太郎・内藤 亮（2016）：東京都千代田区秋葉原地区における商業集積の特徴と変化—2006年と2013年の現地調査結果を基に—。E-journal GEO, 11, pp.85-97.

木内信蔵（1968）：『地域概論—その理論と応用—』東京大学出版会, 375p.

佐藤洋一・ぶよう堂編集部（2008）：『あの日の神田・神保町』ぶよう堂, 80p.

司馬遼太郎（1975）：『世に棲む日日（一）』文春文庫, 286p.

東京都千代田区編纂（1998）：『新編千代田区史 通史編』新宿区, 1266p.

馬場靖憲・渋谷真人（2000）：東京ゲームソフ

- トクラスター―形成要因の総合的考察. 研究
技術計画, 15 (1), pp.33-47.
- 文部科学省 (2009) : 『高等学校学習指導要領解
説 地理歴史編』 169p.
- 文部科学省 (2008) : 『中学校学習指導要領解説
社会編』 161p.

Record of Field Study in Kanda

USHIGAKI Yuya*

Keywords : field study, excursion, geography, college town, Kanda

* Tokyo Gakugei University